



傲然と町を歩けり秋はじめ
 住 斗南子
 糾へる弱気強気や露しとど
 堤 保徳
 嘗て俘虜の手にせし斧や鱗雲
 佐藤 健
 十一月の曇み合うてをり石と石
 唐澤南海子
 氣嵐の黄金色や立山より噉
 幹 自聲
 袈裟懸けのやうなる南部仁王稲架
 後藤 冴子
 小夏日や蹴鞠遊びの唐獅子
 渡嘉敷皓駄
 バラードを流しマニキュア塗る夜長
 小林春代
 爪伸ばしたしと思はず生きて秋
 谷口とし子
 稲滓火や寡黙な弟なほ寡黙
 前島勝子
 けものみち木の実肥りて山重し
 宮坂直子
 鞆祭石に延びをる地蜘蛛の巣
 永田エセ子
 旅に病みて秋雨を聴くボローニヤ
 吉池史江
 魂の抜けて落ちたる熟柿かな
 降 簾 康
 邯鄲や本棚は来し方の景
 伊藤由希子

秋草の名にねこの髭ねずみの尾
 栗原利代子
 木の実降る保育器のやや丸裸
 金子圭子
 出奔の目論見香茸の黝し
 小熊里利
 初冠雪胸飾りたて乗馬服
 中岡草人
 一粒の露や地中の力なす
 西牧千恵子
 ちちろ虫麦門湯を飲みをれば
 木村安以
 ななかまど雲より瀑布生まれり
 市川美八子
 豆叩く吾も干され居る一蕈
 下崎英子
 高みより鴟冷やかしてゐる鳶
 柿谷有史
 文化の日水を買ふ世に生きてをり
 成保房子
 裸婦像に一声掛ける今朝の冬
 中澤清治
 霜切りの電車の走る大糸線
 土屋敏弘
 レクイエムは木の実降る音樹木葬
 成瀬嘉一
 *
 難民の子の小さき荷よ毛糸編む
 高橋節子
 垂直に斜面疾走鹿の群れ
 藤原ひとみ

岳・見えたるひかり 一月

(473)

宮坂 静生

——同人集・岳集・青雲集から

傲然たる町歩き——その風格

傲然と町を歩けり秋はじめ 住 斗南子

悠々と卒寿を超えた作者。町歩きにも矜持がある。人にはいろいろの生き方があるが、商家の息子に生まれ旧制高校卒のエリート意識が半生の支えになった。批判は百もあるうが、庶民の中でこれがおれだと開き直られ、ば私はそれも立派だと思ふ。土意識ではないが藤澤周平の『たそがれ清兵衛』の一シーンをふと思ひ出した。高山の長老。長老の後の結束を。

糾へる弱気強気や露しとど 堤 保徳

人のいい繊細な作者。秋も深くなると、気持が波立つ。それも極端。一本ずーんと筋を通したい思ひへの憧れがあるう。

嘗て俘虜の手にせし斧や鱗雲 佐藤 健

シベリア抑留などの俘虜体験の中で針葉樹林を伐採仕事に

バラードを流しマニキュア塗る夜長 小林 春代

ゆったりした叙情詩風の歌曲バラードを聴く夜長とは優雅この上ない。が、手や足の爪にマニキュアを塗る間とは、さすがに現代娘、どこかポップス調なのがおもしろい。

爪伸ばしたしと思はず生きて秋 谷口とし子

爪を伸ばすくらいで思索し、「思はず生きて秋」と大げさにいったところ、ちぐはぐ加減な生き方がおかしい。

稲滓火や寡黙な弟なほ寡黙 前島 勝子

今月の秀句

気嵐の黄金色や立山より噉 幹 自聲

氷見からみた富山湾あたりの光景か。冬の「気嵐」が立山連峰からの噉(朝日)を受け、黄金色に耀くという。見事な景である。気嵐という地貌季語を用いた句が最近目立つ。北国北海道の人に多い。富山湾の海上に立つ冬の水蒸気で、越中の漁師ことばから生まれたもの。その中でも掲句は出色の作と思う。昨年作者は不慮の事故で長男を失い、痛恨の年であった。今年、前山賞受賞とよき一年にしていたきたい。

用いたいのちの斧。記念館などでの瞥見か。平和な秋の空の鯉雲を仰ぐにつけても、時空を超えた果てを追想した。きびしく自己の日常をかえりみた一句と思う。

十一月の噛み合うてをり石と石 唐澤南海子

さりげない月十一月が効く。庭の石組、あるいは城の石垣。石と石との噛み合いから結束というイメージを描いたものか。

袈裟懸けのやうなる南部仁王稲架 後藤 冴子

岩手の旧南部藩地域の稲架詠。私も先年、南部仁王稲架詠に苦吟をした。こんなにさらっと僧形の形容で立ち稲架のさまを描き、目に見えるようだ。地貌詠として記憶されよう。

小夏日や蹴鞠遊びの唐獅子 渡嘉敷皓駄

本土の小春日を沖繩では小夏日という。除災招福のシンボル唐獅子。おそろしい貌のシーサーが蹴鞠遊びの優しさに興じるとは、ほゝえましい。作者から新聞記事の写真を頂戴した。沖繩の風物は地貌季語を用いないと詠えないであろう。

田仕舞の稲滓火の場景なので外の風景か。不作なのか。不幸な場とは思われないが、寡黙な弟像に注目した。愛がある。

けものみち木の実肥りて山重し 宮坂 直子

「山重し」と山全体を連想した直観が鋭い。

鞠祭石に延びる地蜘蛛の巣 永田エセ子

鍛冶屋の冬祭。旧十一月八日。神前の石に地蜘蛛が巣を張っていた。地味な光景への着眼がいい。職人愛。職人好き。

旅に病みて秋雨を聴くポロニーヤ 吉池 史江

中世以来のイタリア北部の大学の町。どことなく灰色が魅力。ポロニーヤの秋雨。こんな旅も生きる一コマ。

魂の抜けて落ちたる熟柿かな 降旗 康

いかにも熟柿と、その如実な着眼に感心した。努力の人。

秋草の名にねこやねずみ——どこかアニミズム風

秋草の名にねこの髭ねずみの尾 栗原利代子

ねこの髭とは同名の草、あるいは猫じゃらし、ねずみの尾はイネ科の植物にそんな名の秋草がある。猫は髭、鼠は尾がいのちか。身近な猫や鼠の体の一部を草の名にすると、古

愉しきや年木の木口揃へたり 平成八年

「岳」(平成九年二月号)所載。小諸天池辺の囁目。正月に炬に焚く年木を揃え、家壁に積んでいる。木口を薪でとんとんと叩き、整然と積む。少年の日に安曇の母の生家で手伝いをしたことを思い出した。大岡信著『新折々のうた6』(岩波新書)に入る。『山の牧』所収。

漱石旧居栗鼠がくるみを貯へて 平成八年

「岳」(平成九年三月号)所載。一九九五年十二月二十九日成田を発ち、ロンドンへ。徳子同伴、長女淳子が道案内。中心街のピカデリーサーカスに宿をとり、翌三十日に地下鉄クラップムコモン駅で下車、漱石最後の旧居ミス・リール宅を訪ねる。明治三十四年七月から翌年十二月まで、長くいた下宿。生憎記念館は休館。資料を手に、近くの公園を散策。栗鼠が多い。辺りはロンドン南部、勤労者住宅街か。ホスピス施設もある。空気は九十四年前と同じ。漱石はひたすら書籍を貯え、たまには栗鼠とも出合い。身近な実感がある。『山の牧』所収。

年の夜や通の花売赤子抱き 平成八年

「岳」(同上)所載。前書「パリへ」。一九九五年大晦

日にパリのクレベールのホテルマジエスティックへ移動。凱旋門近く、シャンゼリゼーの花売が赤子を抱きながら誘う姿に衝撃を受ける。難民の家族か。薔薇を二本もらう。翌元日にも「シャンゼリゼ子どもがしがみゆる寒さ」「ヴェトナムの売り子やサクレ・クール」の冬」と詠む。ロンドンのテムズ川が五十年ぶりに凍結とか、寒いパリ。

サンジェルマン・デ・プレ教会初雷す 平成九年

「岳」(同上)所載。パリ文教地区にある周知の教会に行く。元旦のミサに出るのが旅の目的のひとつ。突然、初雷に遇う。感激したのはいいが、同伴徳子が財布を掏られる。犯人の目星は付いたが、さすがに向こうはプロ。手から手へ。集団万引きに囲まれ徒労が残る。これも思い出と諦める。

ミラボー橋セーヌ流るる方が恵方 平成九年

「岳」(同上)所載。地下鉄を乗り継ぎ、セーヌを下りミラボー橋に佇む。悠々とセーヌが流れる。今年の恵方の方角へ。アポリネール「ミラボー橋」(堀口大学訳)に憧れた青春。「日も暮れよ／鐘も鳴れ／月日は流れ／わたしは残る」を心に呟きながら。これがミラボーと青い橋の欄干に凭れて。同時吟「竹馬や荒涼たるはヨーロッパ」。欧州吟いずれも『山の牧』所収。

来生きものへの連帯感があったもの。現代人は偉くなりすぎ。

木の実降る保育器のやや丸裸 金子 圭子

自然のみのりの秋、保育器に入れられた赤ちゃんが焦点。丸裸は残酷とはいえ、医療や保育の専門の場ではあたり前。家族にとっては何心配なのだが。季語の冷静な置き方が光る。

出奔の目論見香茸の黝し 小熊 里利

保存が効く黒い香茸を配し、山暮しの思案の一作。現状の暮しを変えんと出奔は頭にあるものの、山暮しの魅力を十分に感じている主人公。ぐいぐいと生存に迫るところに迫力あり。微温湯的ではない。

初冠雪胸飾りたて乗馬服 中岡 草人

あざやかな作。まさに格好よい。大礼の朝のようだ。英国貴族の乗馬姿であるが、胸を飾りたてるのは冬のセレモニーか。今生でこんな夢を見たいと連想を揚げたものであろう。

一粒の露や地中の力なす 西牧千恵子

露への見方にも大地に生きるものへの思いが深い。

ちちろ虫麦門湯を飲みをれば 木村 安以

麦門湯はやぶらんの根を乾燥させ、咳止め、痰切りに。漢

方薬。いかにも古めかしい連想を生かさんと俳人の地下工作隊の如し。

ななかまど雲より瀑布始まり 市川美八子

晩秋の雲中より落ちる大瀑布を描く。爽快な日本画。大観あたりか。俳句とはなにかを考え、模索中なのか。総じて明快な風景画を詠む者の心中は右の如し。体験から。

豆叩く吾も干され居る一蒨 下崎 英子

晩秋か小春の一日か。俳味横溢。「まめ」で結構でした。

高みより鴟冷やかしてゐる鳶 柿谷 有史

鳶と鴟の声の聞分けは鋭し。さすがに有史さん聴覚抜群。

文化の日水を買ふ世に生きてをり 成保 房子

文化とは飲料水も自然の加工品として享受。なさない世となったもの。土も水も買う。いまに空気も購入するか。

裸婦像に一声掛ける今朝の冬 中澤 清治

公園辺のブロンズの裸婦像か。冬に入ったがお達者でと。

霜切りの電車の走る大糸線 土屋 敏弘

架線の霜を落す作業が霜切り。作者の体験詠か。珍しい作。

レクイエムは木の実降る音樹木葬 成瀬 嘉一

樹木の根に眠る樹木葬。シンボルの木が大きくなり実を降らせる。その音を鎮魂曲に。やすらかにという。実がなるまで、なかなか寝につけない人もいるかな。

岳集推薦候補作を掲げる。

声出して痛みを解く山紅葉 内堀紀香子
山葡萄たわわや罌二足立ち 許勢 元貞
落ち割れて顔見世のごと栗双子 成田 光一
秋風やブツクエンドは背き合ふ 川阪 潤子

今月の秀句

邯鄲や本棚は来し方の景 伊藤由希子

本棚に並んだ本を見ると持ち主の来し方がわかる。その通りには違いないが、一冊一冊購入した本の思い出が積った本棚のういういしさにひかれた。父の本棚ではなく、私の本棚。本好き。年輩ではないが若くもない。本を介して来し方を省みる落ちつきにはこれからの人生への模索の意味も籠められているであろう。邯鄲は淡黄色の弱々しい虫。りゅうりゅうとかぼそく鳴く虫の音色が思索的だ。秋田「岳」衆元氣！

霜折や溜池にぶく揺れるたり 田中 純子
前へ向く力となりぬ豆こなし 酒井 里

青雲集から―つねに「青雲の志」は美しい。

難民の子の小さき荷よ毛糸編む 高橋 節子

難民キャンプの寸景か。子の「小さき荷」が胸に刺さる。寸暇での毛糸編みも必死の仕事。つねにこの一刻を生きることに全力をそそぐ以外に生存がないとは、なんとさびしいことか。なぜ、世界の人々がこの現実を目ざめないものか。

垂直に斜面疾走鹿の群れ 藤原ひとみ

ブリュッゲルの「雪中の狩人」、クールベの「雪の中を駆ける鹿」などの画を見るようだ。必死の厳しい緊迫感がある。「垂直に斜面」と幾何学的な構図が珍しい。追われているときには無謀な行為が目の前に展開する。そんな生きもの姿を見る時には茫然となる。しかし、気付いてふりかえるとなんか多い。

今月から青雲集をもうけた。新しく俳句を始める初心の方々の希望者を中心にした欄である。当然、その中からも推薦句を掲げる。いずれも迫力あり、深く感銘した句に出会え、うれしいことであった。毎月、この欄を中心に「岳」への投句者がふえることが期待される。よい一年を。